

演劇と国家 ベルギーの連邦化の過程と舞台芸術

藤 井 慎太郎

ベルギーは過去40年以上の間に、1970年、1980年、1989年、1993年、2001年と幾度にもわたる国家制度改革を経験し、単一国民国家から連邦国家へと国のあり方を根本的に変容させるとともに、この30年来、世界的に知られる舞台芸術家を数多く生み出してきた。本論考は、国家制度が変容する過程において、いかに文化政策の枠組みもまた変化し、今日の舞台芸術政策の枠組みが形成されてきたのか考察することを目的とする。

だが、その問いに答えることは実は単純なことではない。ベルギーでは、かつて中央政府が文化に関して持っていた権限はわずかな例外を除いて、1970年以降、現在でいう共同体政府に委譲されている。つまり、ベルギーの文化政策を理解するには、1つの国家のなかに3つの地方（地域とも訳される）と3つの共同体が同時に存在するという、ベルギーに固有の複雑な連邦国家制度を理解する必要があるし、さらに、国家制度改革の原因となったオランダ語話者とフランス語話者の歴史的対立を理解する必要があるからである。

そのため本論では、まずベルギーの国家制度の連邦化の歴史的経緯、それと並行して文化政策が分権化されたことによって生じた枠組みの変化を振り返る。それから、連邦政府、フランダース、フランス語共同体（ワロニー＝ブリュッセル連邦）、ブリュッセル首都地方に関して、とりわけ舞台芸術に関わる政策を詳しく見ることにする。

ベルギーの連邦化 その歴史的経緯

ベルギーの人口は（東京都よりも少ない）1000万人あまり、面積は（四国と九州の間である）3万 km²あまりの「小国」である。だが、ベルギーの建国以来、オランダ語圏とフランス語圏との間の対立はやむことなく先鋭化し続け⁽¹⁾、緊張が高まれば、その解消のために国家制度を改革することを繰り返し、きわめて複雑な制度を生み出してきた。1993年以降、ベルギーが「連邦国家」であることが憲法にも明記され、連邦政府・議会と並んで、フランダース⁽²⁾共同体（Vlaamse Gemeenschap）、フランス語共同体（Communauté française）、ドイツ語共同体（Deutschsprachige Gemeinschaft）の3つの（言語に基づく）共同体政府・議会、フランダース

* 本論文は JSPS 科学研究費（2012-4年度採択課題「フランス、ベルギー、カナダにおける国内・対外文化政策の再構築」、研究課題番号24520184）の助成を受けた研究の成果である。

地方 (Vlaams Gewest)、ワロニー地方 (Région wallonne)、ブリュッセル首都地方 (仏 Région de Bruxelles-Capitale、蘭 Brussels Hoofstedelijk Gewest) の3つの (地理的区分に基づく) 地方政府・議会とから構成される。またこれらの政府・議会に間に序列関係はまったくなく、対等であるとされる。ベルギーは、大きく見ればオランダ語圏とフランス語圏とに二分されるものの、フランダースでは共同体と地方が合併して単一の政府を構成していること、二言語地域であるブリュッセル首都地方が存在し、またその法的地位はフランダース、ワロニーとは同じではないこと、人口はわずかながらドイツ語圏が存在することなどによって、その政治機構は南北で非対称であることにも注意しなければならない⁽³⁾。

この複雑なメカニズムが生み出された背景には、ベルギー王国建国に至る複雑な経緯がある。ハプスブルク領であった低地地方 (仏 Pays-Bas、蘭 Nederland) から、オランダ独立戦争 (1568～1648) を経てプロテスタントの北部がオランダとして独立した後も、カトリックの南部はハプスブルク家 (スペイン、ついでオーストリア) の支配下にとどまった。フランス革命直後にはフランスに併合され、ナポレオン失脚後のウィーン体制においてオランダ王国の一部となるが、オランダによるオランダ語話者・プロテスタント優遇政策に反発していたブルジョワジーが主導するかたちで、1830年のフランス七月革命の直後にベルギー革命が起こり、ベルギー王国として独立を宣言した。独立を主導し、権力を握ったブルジョワジーは、特に19世紀には国の南北を問わずにフランス語を話していた一方で、南部においても人口の多くはフランス語を用いていなかった事実にも見られるように、言語は、地理的要因や民族的要因よりもむしろ階級によって規定されていた。オランダから独立した後は、オランダとオランダ語に対する反発もあって、フランス語一言語主義にもとづく単一的な国民国家の建設が目指された。男子普通選挙が完全なかたちで実現するまでは⁽⁴⁾、人口の上では少数派であるフランス語話者が過大に代表されていたことがそれを可能にしていた。今日ではベルギーはオランダ語圏の北部 (フランダース) とフランス語

-
- (1) 2007年6月の総選挙の際にも、組閣には半年以上 (194日) を要したが、2010年6月13日に行われた総選挙の後には、1年半 (541日) 後の2011年12月6日ようやく、フランス語圏で比較第一党となった社会党のエリオ・ディ・ルポ (Elio di Rupo) を首相とする連立政権が誕生した。フランダースの分離独立を掲げてオランダ語圏で比較第一党となった新フランダース連合 (Nieuw-vlaamse Alliantie, N-VA) が妨げとなって、連立のための政党間の合意が得られず、新しい内閣を組閣できないままであり、一時は国家としてのベルギー連邦の消滅さえも危惧されるほどであった。
- (2) オランダ語の発音を尊重すればフラーンデレン (Vlaanderen) となるが、ここでは英語の発音に基づいたフランダース (Flanders) の表記をとる。
- (3) 1980年に共同体に加えて地方が創設されると同時に、連邦構成体 (entités fédérées) といわれるこれらの政府の合併が法的に可能となり、フランダースでは、共同体が地方を吸収するかたちで合併して、単一のフランダース政府 (Vlaamse Overheid) を形成している。そしてその首都は、フランダース地方には含まれない上に、オランダ語話者が少数派であるブリュッセルに定められた。
- (4) ベルギーでは、1893年の選挙制度改革によりすべての成人男性に選挙権が与えられたが、財産などに応じて1人が1票から3票を有する不完全なものであった。男子完全普通選挙が実現するのは1919年のことである。

圏の南部（ワロニー）から構成されると見なされるとしても、属地主義にもとづく一言語主義のもと、言語と領土とが結びつけて考えられるようになるのは20世紀に入ってからのことではかないことには注意しなければならない。

建国当初のベルギーでは、オランダ語（および多くの地域言語）は教育や司法など公的な領域では使用が認められなかったし、高度な知識や教養を表現するのに適した言語とはなおのこと見なされなかった。アントワープに1862年に生まれたモーリス・メーテルランク（Maurice Maeterlinck）やブリュッセルのフランダース人の一家に1898年に生まれたミシェル・ドゥ・ゲルドロード（Michel de Ghelderode）らの劇作家が、フランス語のみによってその著作を著したとしても、オランダ語による高等教育が当時のベルギーにはまだ存在しておらず、社会的成功とフランス語の使用が切り離せなかった以上は、不可思議なことではないのだ。19世紀には、アントワープやアントワープにおいてフランス語レパートリーを上演する演劇・劇場はオランダ語演劇・劇場を上回る公的支援を受けていたし、これらの劇場はフランス語を話すブルジョワジーの社交の場としてきわめて大きい影響力を有していた。

オランダ語話者によるフランダースの自治、フランス語の排除によるフランダースのオランダ語化を目指すフランダース運動（仏 *Mouvement flamand*、蘭 *Vlaamse Beweging*）はしかし、ベルギー建国以来、着実に強まっていった。1878年以降、北部ではフランス語と並んでオランダ語も公的領域で用いることが可能になり、1898年には対等法（*Loi d'équivalence*）と呼ばれる法律によって、オランダ語もフランス語と対等な公用語として認められた（しかし、この時点ではフランダースは二言語地域にとどまっていた）。その後、フランス語一言語主義が確立していた南部地域と同じかたちで、フランダースのオランダ語一言語主義化を求める動きが強まり、1921年の法律によって、オランダ語圏とフランス語圏を隔てる言語境界線（仏 *frontière linguistique*、蘭 *taalgrens*）の概念が生まれるとともに、フランダースにおけるオランダ語一言語主義が確立する。1923年から1930年にかけて、アントワープ大学がまず二言語化ついでオランダ語化され、続いて他のフランダースの大学もオランダ語化されていった。

言語境界線は10年ごとの人口調査の結果に基づいて見直されることになっていたが、そのたびにフランス語がオランダ語圏に浸透し、話者を増やし続けているという事実が明らかになり⁽⁵⁾、

(5) 1947年の国勢調査の結果、ブリュッセルとその近郊を筆頭に、言語境界線付近でフランス語話者が大きく増加したフランダースの自治体が目立った。ダイグロシアの上位変種であるフランス語への言語転移が、オランダ語への転移を上回っていたためである。この結果が1954年になるまで公表されなかったことが示すように、こうしたフランス語の優位性を示す事実はフランダース運動を担う人々にとっては受け入れがたく（言語境界線付近に顕著なこの現象は「フランス語の油染み」と呼ばれる）、フランダースの多数の市長が国勢調査に非協力の姿勢を見せたことによって、1961年に国勢調査の質問項目から言語に関する質問が削除されるとともに、1962-3年には言語境界線が固定されることになった。そのためにブリュッセルの人口におけるフランス語話者とオランダ語話者の割合も正確な統計は存在せず、たとえば選挙の際の投票行動などから推測するほかなくなっている。

これを屈辱的ととらえたフランダース側の求めによって、言語境界線は1962-3年に永久不可侵の国境のごとく固定された。また、長いことベルギーにおいては、裕福なフランス語圏と貧しいオランダ語圏という図式が成り立っていたが、第二次世界大戦後、ベルギー南部の経済の牽引力であった石炭・鉄鋼などの重工業が空前の不況に陥り、フランス語とその話者の優位性は揺らぎ、1967年には南北の1人あたり国内総生産は肩を並べた（今日では経済水準は完全に逆転し、フランダース人の所得はヨーロッパでも有数の水準に達している⁽⁶⁾）。1968年には、フランダース地方にあって完全にオランダ語化されずに二言語大学として最後まで残っていたルーヴァン大学が、フランス語部局の排斥（“Walen buiten”、「ワロニー人、出て行け」）を叫ぶフランダース人の連日の抗議運動に屈して、言語別に分割され、フランス語部局が言語境界線を越えてわずか数十キロメートル南のルーヴァン＝ラ＝ヌーヴに移転されることになったが、これはベルギーの言語別分離が決定的な段階にきたことを人々に印象づけた。それに続いてベルギーの歴史的三大政党も、キリスト教民主主義政党（1968）、リベラル政党（1970）、社会民主主義政党（1978）と、相次いで言語圏別に分割され、政治における国民的一体性も失われた。こうしたなか、ベルギーはついに単一的な国民国家の道をあきらめ、1970年の国家制度改革を皮切りに、連邦国家への道を進み始めたのだった。それに伴って、文化政策の立案・実施主体も大きく変化することになる。

連邦化の過程における文化政策の変容と現状

言語と文化は、1970年に連邦政府から共同体（当時はオランダ語/フランス語文化共同体文化審議会 Conseil culturel de la communauté culturelle néerlandaise/française と呼ばれた）に移管された最初の権限であったが、1989年には教育政策も共同体に移管され、1993年には国際問題も共同体・地方政府にその権限の範囲内で移管されている。つまり、文化や教育の領域において共同体政府は、その権限の範囲内で外国と条約や協定を結ぶことができるということである。実際、共同体政府は複数の外国政府と文化協定を結んでいるのだが、多くの文化人が嘆くように、フランダース政府とフランス語共同体政府との間には文化協定はいまだ結ばれていない（反面、たとえばドイツ語共同体政府はフランダース政府ともフランス語共同体政府とも協定を結んでいる）。

オランダ語圏とフランス語圏の間の対話が不足し、その交流が限られている一方、欧州統合の深化を背景に、国境を越えた隣国との協調は逆により盛んになってきている。フランダースとオランダとの間では演劇人の往来も盛んであり、オランダ人ヨハン・シモンズ (Johan Simons) が2010年まで NTGent の芸術監督、フランダース人イヴォ・ヴァン・ホーヴェ (Ivo Van Hove) が演劇集団アムステルダム (Toneelgroep Amsterdam) の芸術監督を務めている。1987

(6) 国内総生産は、フランダース1777億€、ブリュッセル572億€、ワロニー712億€、1人あたり国内総生産はフランダース2万9000€、ブリュッセル5万5000€、ワロニー2万700€（すべて2007年、購買力平価にもとづく）となっている。http://europa.eu/rapid/press-release_STAT-10-25_fr.htm

年から2005年までは、オランダとフランダースで前シーズンに上演された演劇作品から批評家によって選ばれた作品を上演するオランダ語演劇祭 (Het Theaterfestival) が共同で開催されていた (2006年以降はオランダとフランダースとで2つの演劇祭に分裂し、一部の演目が共通となるにとどまっている)。フランス語圏とフランスとの間の協働関係も深化しており、2002年以来、劇場ル・マネージュ (Le Manège) はフランスのモーブージュだけでなく、国境を越えたベルギーのモンスにも拠点を持ち、両者は一体的に運営されるようになっていく。ワロニー地方にあってフランス国境に近接するトゥルネーはフランスのリールとの連携を深めており、そこにオランダ語圏の都市コルトレークも加わり、2008年には国境を超えた広域連合ユーロメトロポール・リール＝コルトレーク＝トゥルネー (Eurométropole Lille-Kortrijk-Tournai) が正式に発足している⁽⁷⁾。共通の文化パスを発行したり、ネクスト・アーツ・フェスティバル (Next Arts Festival) を複数都市で開催したりしているが、フランスを介することでオランダ語圏とフランス語圏の間の協調がようやく可能になっている状態だといえる。

こうして、過去40年以上にわたって、しばしば互いを無視 (さらには敵視) するかのようになり、両言語共同体が独自の文化政策を進展させてきたために、ベルギー全体を網羅し、オランダ語圏とフランス語圏の比較を可能にするような調査研究や統計もまた少ない。フランス語共同体政府が2010年に公表した調査結果は、その数少ない例の一つであるが、それによると2007年におけるベルギー全体の文化・スポーツに対する公的支出は41億9914万€に上る (国内のすべてのレベルの政府の支出を合わせた数字である)⁽⁸⁾。連邦政府、ブリュッセル首都地方政府、首都地方市町村の支出はひとまず置いて言語圏別に支出を比較するならば、フランダース政府 (総額の35.3%)・州 (3.1%)・市町村 (23.1%) に対して、フランス語共同体政府 (16.6%)・ワロニー地方政府 (2.3%、主に文化財に関わる)・州 (2.2%)・市町村 (8.2%) となり、オランダ語圏 (61.6%) とフランス語圏 (29.3%) の差は歴然としており、経済的繁栄を謳歌するオランダ語圏と、第二次世界大戦後以来の不況から立ち直れず、厳しい財政状況に置かれたままのフランス語圏の格差を反映しているといえる。連邦レベルの支出は、連邦政府 (2.4%)、宝くじ収益金からの支出 (0.8%) を合わせてもわずかである。また、ブリュッセルについては、ブリュッセル首都地方政府 (1.0%)、後述するフランス語共同体委員会 (COCOF、0.3%) とフランダース共同体委員会 (VGC、0.7%)、首都地方にある市町村 (3.6%) を合わせても5.6%となり、連邦文化施設はブリュッ

(7) この背景には国境地帯における協調を後押しする欧州連合の地域政策がある。欧州連合の資料によると、欧州地域開発基金によるフランスとベルギーの間の国境間協調はすでに四期 (1990～1993年、1994～1999年、2000～2006年、2007～2013年) にわたり、2007～2013年には、欧州連合 (1億3813万€)、各国政府・自治体 (1億1039万€)、合わせて2億4852万が投じられ、うち30%が文化・観光を通じた地域アイデンティティの発展にあてられるという。http://ec.europa.eu/regional_policy/atlas2007/eu/crossborder/index_en.htm#

(8) *Faits et gestes, Débats et recherches en Communauté française Wallonie-Bruxelles*, Secrétariat Général du Ministère de la Communauté française, no.35, automne 2010, p.2.

セルに集中していることから、先の連邦政府の支出（3.2%）を加えたとしても8.8%にとどまり、人口の割合（約10%）を下回る。多くのヨーロッパ諸国では、伝統的に首都に文化施設が集中し、人口の割合を上回る水準の文化予算も投じられていること、また現実にはブリュッセルにも数多くの文化施設が集中していることを考えると意外な数字であるが、これも後述するベルギーとブリュッセルに特有の事情が影響している。

ベルギー国内の公的文化スポーツ予算支出（2007年）

行政府の区分	金額（千€）	割合
連邦政府	100 879	2.4%
国営宝くじ	33 070	0.8%
フランダース共同体	1 483 880	35.3%
フランダース地方にある州	132 247	3.1%
フランダース地方にある市町村	971 005	23.1%
フランダース共同体委員会	29 560	0.7%
ブリュッセル首都地方	40 381	1.0%
ブリュッセル首都地方にある市町村	151 313	3.6%
フランス語共同体委員会	13 800	0.3%
フランス語共同体	695 843	16.6%
ワロニー地方	98 274	2.3%
ワロニー地方にある州	90 994	2.2%
ワロニー地方にある市町村	344 368	8.2%
ドイツ語共同体	13 526	0.3%
合計	4 199 139	100%

出典 *Faits et gestes, Débats et recherches en Communauté française Wallonie-Bruxelles, Communauté française, no.35, automne 2010, p.2*

連邦政府

フランスで1959年にアンドレ・マルローが文化大臣に任命されるのにも先駆ける1958年、ベルギーではピエール・アルメル（Pierre Harmel）が初代文化大臣に任命されている。だが、1960年代から、その政策はオランダ語圏とフランス語圏に関して別個に立案されるようになり、共同体政府に権限が委譲された現在では、連邦政府の水準では一国の文化政策と呼べるような政策はもはや残されていない。だが、もっぱら首都ブリュッセルに位置する王立モネ劇場（仏 Théâtre royal de la Monnaie、蘭 Koninklijk Muntchouwburg）、国立オーケストラ（仏 Orchestre

national de Belgique、蘭 Nationaal Orkest van België)、美術宮 (仏 Palais des Beaux-arts、蘭 Paleis voor Schone Kunsten、近年はボザール Bozar という通称を自ら名乗り、それによって知られている)、および王立美術館・博物館・図書館・シネマテークなどのわずかな芸術組織・施設が現在も連邦政府 (前者は首相府、後者は科学政策) の所管として残っている⁽⁹⁾。所管の施設の数はいくつかは少ないとはいえ、2010年の場合で3333万2000€の助成金がモネ劇場には投じられている。また、国営宝くじの収益金の一部が、連邦政府所管の文化施設に対する助成金や、共同体政府を通じて芸術文化に対する助成金に充てられている。モネ劇場はベルギーひいてはヨーロッパを代表するオペラハウスとしてすぐれたオペラ作品とバレエ・ダンス作品を制作しており、モーリス・ベジャール (Maurice Béjart)、アンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケル (Anne Teresa de Keersmaeker) をレジデント・アーティストに迎え入れたことでも知られている。ヘラルト・モルティール (ジェラルド・モルティエ) (Gerard Mortier) は、1981年から1991年までモネ劇場支配人を務め、ベジャールと対立し、ベジャールが1987年に本拠地をローザンヌに移す一因となったことでも知られる人物だが、後にドイツのルール・トリエンナーレ芸術監督やパリ・オペラ座支配人も歴任することになり、パリ・オペラ座支配人の任期中には、同じゲント出身のアラン・プラテル (Alain Platel) 振付の『ウルフ (*Wolf*)』をオペラ座ガルニエ宮の舞台にかけて話題を呼んだ。

連邦政府はさらに、その権限に属する雇用・労働政策を通じて、間接的に芸術文化にも影響を及ぼしている。ベルギーには、隣国フランスのアンテルミタン制度に類似した、フリーランスで働く芸術家を給与所得者と見なし、仕事のない期間に手当を支給する制度が、言語圏によらずに存在している。これは、芸術家がまったく関係のない副業に就く必要なく、自らの芸術活動に専念することを可能にする点で、きわめて重要な役割を果たしている。1998年に結成された SMartBe と呼ばれる芸術家の互助組織が (これも言語圏によらない)⁽¹⁰⁾、芸術家個人・組織の代理人として権利・経理・契約書関係の管理や助言にあたり、芸術界の利害を政府に対して代弁したり、重要な役割を果たしている。

(9) 連邦政府レベルでは、政策立案実施の単位は、もはや防衛省を除いて省 (ministère) という名称すら用いられず、SPF あるいは SPP (連邦公共サービス Services publics fédéraux あるいは連邦計画公共サービス Services publics fédéraux de programmation オランダ語では FOD、Federale Overheidsdiensten と POD、Programmatorische Federale Overheidsdiensten) と呼ばれている。首相府は SPF (FOD)、科学政策は SPP (POD) とされる。

(10) www.smartbe.be

連邦政府（首相府） 舞台芸術関連助成金（2010）

助成対象施設	助成金額（€）
Théâtre de la Monnaie	33 332 000
Orchestre national de Belgique	7 410 000
Bozar	12 079 000

出典 *Rapport d'activités 2010*, Service Public Fédéral Chancellerie du Premier Ministre, 2011, p.54

共同体政府

ベルギーにおいて文化政策の中心を担っているのは共同体政府である。フランダース政府はフランダース地方の住民、およびブリュッセル首都地方のオランダ語話者、フランス語共同体政府は（ドイツ語圏を除く）ワロニー地方の住民、およびブリュッセル首都地方のフランス語話者に対して、政策を立案・実施している。ドイツ語共同体（人口7万人ほど）は、ワロニー地方東部にある一部の自治体で多数を占めるドイツ語話者に関わっているが、その人口は国内人口の1%にも満たないため、ここではフランダース政府とフランス語共同体政府の政策のみをとり上げて論じる。

フランダース

フランダースの首都は（フランダース地方には位置しない）ブリュッセルに定められている。フランダースの人口（610万人超）はアントワープ（46万人）を筆頭に、ゲント（23万人）、ブリュージュ（11万人）、ブリュッセル（正確な統計は存在しないが、オランダ語話者は人口の5～15%、すなわち6～17万人と見られる）などいくつかの都市に分散しており、芸術文化施設もまた分散している。舞台芸術に関していえば、ブリュッセルは人口以上に重要な役割を果たしている。ブリュッセルで19世紀以来、伝統的に優勢なフランス語文化に対抗し、それを国際的に示す必要からも、ブリュッセルにおけるオランダ語文化の発展に力を入れていることが指摘できよう。2008年の金融危機まで続いた好景気にも助けられて、文化予算はさらに大きな伸びを示した⁽¹¹⁾。危機後もベルギーは金融危機の影響をさほどは受けなかったこともあって、フランダースの文化予算も英国やオランダにおけるような予算削減の憂き目には遭っておらず、芸術法の枠組みにおける2013-6年度の4年分の助成金申請の採択結果が2012年6月に公表された際には、助成金の総額は予定を上回って1億400万€に達して関係者を驚かせた⁽¹²⁾。

文化政策が共同体の権限とされる以前から、ブリュッセルに王立フランダース劇場（KVS、

(11) フランス語共同体の調査結果によれば（註8を参照）、フランダース政府の文化スポーツ予算は8億7932万€（2002年度）から14億8388万€（2007年度）に伸びている。

Koninklijk Vlaams Schouwburg 前身となる劇団の結成は1852年、劇場を持つのは1877年)、アントワープに王立オランダ語劇場 (KNS、Koninklijk Nationaal Schouwburg、前身の国立劇場の創設は1853年、現在の名称はヘット・トネールハウス Het Toneelhuis) が19世紀以来すでに存在し、さらに、ゲント・オランダ語劇場 (Nederlands Theater Gent、1899年以来長いこと KNS の第二劇場となっていた市立劇場を母体として、1965年に NTGent に改組された) や、王立フランダース・バレエ団 (Koninklijk Ballet van Vlaanderen、1969年創設) がそこに加わった。しかし、これらのオランダ語劇場は冒険のないレパートリーが支配的であったとされる。同時に、たとえば王立フランス語劇場 (Théâtre royal français、アントワープ、1834年開館、建築家の名前 Burla にちなんでブルラ劇場とも呼ばれる) やグラン・テートル (Grand Théâtre、ゲント、1840年開館) などフランス語系の劇場 (オペラハウス) も存在し、とりわけ19世紀には主にブルジョワジーの観客の社交の場として重要な役割を果たしていた。きわめて示唆的なことに、これらの劇場は当時の優雅な外観を残し、都市のランドマークであり続けながら、現在ではヘット・トネールハウス (Het Toneelhuis) とフランダース・オペラ (Vlaamse Opera) というフランダースを代表する上演組織の拠点に変容している。

状況が大きく変化するのは、制度の一部をなしていたこうした劇場に飽き足らない若者によって、1970年代以降、各地に実験的なアーツ・センター (kunstencentra) が創設されてからである。1980年代以降、フレミッシュ・ウェイヴ (Flemish Wave) と呼ばれる新しい波を生み出したアーティストは、こうした旧来の制度の外部から現れたのだった。ブリュッセルのカイテアター (Kaaithheater、1977年にフェスティヴァルとして創設、1993年に現在の場所に開館)、ブルススハウブルフ (Beursschouwburg、1947年開館)、アントワープのドゥ・シングル (DeSingel、1980年開館)、ゲントのヴォーラウト (Vooruit、1982年開館)、ニューポルトテアター (Nieuwpoorttheater)、ルーヴァンのストウック (Stuk、1970年代後半にルーヴァン大学の学生たちの運動を母体として生まれた)、ブリュージュのドゥ・ウェルフ (De Werf、1986年開館) などが、政府による支援が旧来の制度的劇場に限られる状況のなか、(アントワープ市の整備計画によるドゥ・シングルを除いて) 公的支援も受けないまま、主に若者の運動の中から自発的に生まれていった。これらのアーツ・センターは、演劇とダンスといったジャンルの区別も、ハイ・カルチャーとポップ・カルチャーの区別もなく、はじめから多領域にまたがるものだったが、1980年代の舞台芸術の急激な発展の舞台となり、その変化を下支えした。これらのアーツ・センターは1990年代以降、フランダース政府による大規模な支援を受けるようになり (今日では上記のアーツ・センターの多くが、フランダース政府から100万€を超える助成金を受けているが、市町村もこれらの施設に相当額の助成をおこなっている)、多様性と柔軟性は残したまま、劇場制度の

(12) <http://www.cjsm.vlaanderen.be/cultuur/downloads/pb-104-miljoen-euro-subsidie-voor-kunstenorganisaties20120622.pdf>

中心を構成するようになった。さらにその影響によって、KVS（芸術監督ヤン・ホーセンス Jan Goossens）、NTGent（芸術監督ウイム・オブブルック Wim Opbrouck）、ヘット・トネールハウス（Het Toneelhuis、芸術監督ヒー・カシールス Guy Cassiers）もアーツ・センター以上に手厚い支援（2～300万€）を受けながら、芸術監督の世代交代とともに先鋭的・領域横断的な表現を志向するように大きく変化している。

フランダース政府の文化政策の根拠となるのは、演劇法（Theaterdecreet、1975～1993年）、舞台芸術法（Podiumkunstendecreet、1993～2006年）、芸術法（Kunstendecreet、2006年～）である（これらは共同体のみに適用される）。当初の演劇法においては伝統的なジャンルだけが想定されていたが、現代ダンスの著しい発展やアーツ・センターの果たす重要な役割を考慮に入れて、舞踊やアーツ・センターに対する助成が制度化されたほか、カンパニー助成も単年度助成だけでなく複数年度助成（2年ないし4年間）、ジャンルの枠に収まらない横断的な表現に対する助成もおこなわれるようになった。tg STAN（2013年度以降の1年あたり助成額74万€）、ヤン・ロワース（Jan Lauwers）が率いるニードカンパニー（Needcompany、90万€）、アンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケルが率いるローザス（Rosas、160万5000€）、ヤン・ファールブル（Jan Fabre）のトラウブレイン（Troubleyn、84万€）、アラン・プラテルのレ・バレエ・C・ドゥ・ラ・B（Les Ballets C. de la B、87万€）、ウイム・ヴァンデケイビュス（Wim Vandekeybus）のウルティマ・ヴェス（Ultima Vez、104万€）をはじめとする主要な上演団体には、かなり潤沢といえる水準の助成が4年間にわたって約束されている。

舞台芸術専門誌『Etcetera』（9万5000€）が1983年に創刊され、舞台芸術に関する情報を集約し、資料の収集・公開、制度研究や政策提言も行うフランダース演劇研究所（Vlaams Theater Instituut、VTI、2013年度助成金82万3000€）が1987年に創設されたことによっても、フランダースの舞台芸術環境は整備されていった。演劇教育についてはRITS（ブリュッセル、1962年創設）、ステュディオ・ヘルマン・テルリンク（Studio Herman Teirlinck、アントワープ、1946年創設、2000年にアントワープのコンセルヴァトワールと合併してヘルマン・テルリンク研究所となった）、ゲント・コンセルヴァトワールが重要な役割を果たしている。舞踊教育に関しては、ベジャールが設立したムードラ（ブリュッセル、1970年～1988年）がなくなって以来、大きな空白が生じていたところに、そのムードラの出身であり、モネ劇場のレジデント・アーティストであったアンヌ・テレサ・ドゥ・ケースマイケルが1995年、モネ劇場と共同してブリュッセルに舞踊学校PARTS（Performing Arts Research and Training School）を設立し、現代ダンスに関して世界的にもっとも重要な教育拠点のひとつとなっている⁽¹³⁾。

(13) 予算の大半はフランダース政府の助成によっている。

フランダース政府 舞台芸術関連助成金 (2013年度以降の助成)

助成カテゴリーと団体名	助成金額 (€)
演劇・劇場 Theater	総額 26 225 000
Bronks Jeugdtheater	1 084 000
Het Toneelhuis	3 000 000
Het Paleis	1 150 000
Koninklijke Vlaamse Schouwburg	2 250 000
Speeltheater Kopergieterij	1 084 000
Laika	706 000
Needcompany	900 000
NTGent	2 350 000
Stan vzw	740 000
t Arsenal	914 000
Theater Antigone	830 000
Theater Malpertuis vzw	630 000
Theater Zuidpool	550 000
Toneelproducties De Tijd	550 000
Troubleyn / Jan Fabre	840 000
舞踊 Dans	総額 6 916 000
Damaged Goods	740 000
Eastman vzw	768 000
Les Ballets C. de la B.	870 000
Rosas	1 605 000
Ultima Vez	1 040 000
多領域 Multidisciplinair	総額 20 004 000
Argos	625 000
Beursschouwburg	980 000
Buda Kunstencentrum	1 000 000
De Werf	870 000
Kaaitheater	1 845 000
kunstencentrum nOna	644 000
Kunstencentrum Vooruit	2 215 000
KunstenFESTIVALdesArts	1 030 000

助成カテゴリーと団体名	助成金額 (€)
Monty	600 000
Stuk	1 628 000
Victoria Nieuwpoort vzw (CAMPO)	1 165 000
Villanella Kunsthuis voor Kinderen en Jongeren vzw	650 000
Zomer van Antwerpen	516 000
音楽劇 Muziektheater	総額 4 410 000
Het muziek Lod	1 087 000
Muziektheater Transparant	1 087 000
出版 Publicaties	総額 468 000
支援組織 Steunpunt	総額 2 730 000
Vlaams Theater Instituut	823 000

出典 *Kunstendecreet 2013-2014-16 : Overzicht Beslissingen*, Kunsten en Erfgoed, Vlaamse Overheid, 2012から、舞台芸術関連で助成金額が50万 €を超えるものを抜粋

フランダーズ政府が認定する大規模組織 (Grote Instellingen) に対する助成金 (2009)

deFilharmonie	7 092 043
deSingel	5 595 000
Koninklijk Ballet van Vlaanderen	5 811 386
Vlaamse Opera	17 243 000
Vlaams Radio Koor en Orkest	8 210 566

出典 *Jaarverslag 2009*, Kunsten en Erfgoed, Vlaamse Overheid, 2010

フランス語共同体

フランス語共同体の人口(約430万人)は、ワロニー地方の住民(340万人)とブリュッセル首都地方のフランス語話者(90~100万人と推定される)とに大分される。フランス語共同体の首都はブリュッセル、ワロニー地方の首都はナミュール(10万人)に置かれ、そのほかの主要都市としてはシャルルロワ(20万人)、リエージュ(19万人)が挙げられる。ワロニー人とブリュッセル人とのアイデンティティ意識にはずれがあり、フランス語を話しているからといって必ずしも同一の共同体を形成している意識がないことは大きな特徴である⁽¹⁴⁾。また、フランダーズ

(14) ベルギー・フランス語共同体が、2011年5月から名乗っているワロニー＝ブリュッセル連邦の名称はその表れといえる。

人が、オランダ人と言語（およびその文法・正書法）を共有しつつも文化的差異を明確に意識しているのに比べて、フランス人との差異はそれほど強く認識されておらず、仮にフランダースがベルギーから分離独立した場合にはフランスへの帰属を求めるべきだとする意見も根強い⁽¹⁵⁾。正式名称であるベルギー・フランス語共同体（Communauté française de Belgique）の意味が分かりにくいために⁽¹⁶⁾、ワロニー＝ブリュッセル（Wallonie-Bruxelles）という呼称も用いられてきたが、2011年5月以降は「ワロニー＝ブリュッセル連邦（Fédération Wallonie-Bruxelles）」という呼称が「ベルギー・フランス語共同体」に代わって正式に用いられている⁽¹⁷⁾。ワロニー＝ブリュッセル・アンテルナショナル（Wallonie-Bruxelles International）⁽¹⁸⁾の監督下に置かれたワロニー＝ブリュッセル・テアトル・ダンス（Wallonie-Bruxelles Théâtre/Danse）と呼ばれる組織が、演劇やダンスの国外での普及を後押ししている。フランス語共同体政府はそのほか、パリに小劇場も併設したワロニー＝ブリュッセル文化センター（Centre culturel Wallonie-Bruxelles）、アヴィニオンにはドン劇場（Théâtre des Doms）を有して、いわばショーケースとして利用している。

フランス語圏の劇場制度の頂点に位置づけられるのは、ブリュッセルにあつて「ナショナル（National）」と呼ばれるフランス語共同体国立劇場（Théâtre national de la Communauté française、演劇が中心だが、振付家ミシェル・ノワレが2006年からレジデント・アーティストに迎えられている）、振付センターであるシャルルロワ／ダンス（シャルルロワのほか、ブリュッセルにあるラ・ラフィヌリー（La Raffinerie、旧製糖工場）も拠点としている）であり、共同体政府による助成金も順に651万6000€、332万€（2012年）に上り突出している。ベルギー＝フランス国境地域における文化協調のユニークな例であるモンスのル・マネージュ（Le Manège-Mons）も、モンスが2015年の欧州文化首都に選ばれていることもあつて、これまで以上に手厚い支援（539万2000€）を受けている。それに加えて、ヴァリア劇場（Théâtre Varia、ブリュッセル）、ラ・プラス劇場（Théâtre de la Place、リエージュ）、ナムュール劇場（Théâtre de Namur、ナムュール）など5つの地方演劇センターがあり（2012年度助成総額529万4000€）、さ

(15) フランスでの出来事は国内事件のように認識されており、たとえば2012年5月のフランス大統領選挙はまるで自国の選挙のように大々的に報道された。

(16) かつてのフランス大統領フランソワ・ミッテランが、ベルギー・フランス語共同体のことをベルギーのフランス人コミュニティだと考えたという逸話が残っている（フランス語の表現上はどちらもとも解釈できる）。
www.lalibre.be/actu/belgique/article/662174/la-journee.html

(17) Fédérationは連合や連盟とも訳しうるが、ここで含意されているのは連邦としてのそれである。またこれも、ブリュッセルにはフランス語共同体政府だけでなくフランダース政府の権限も及ぶ上に、ワロニー地方にはドイツ語圏地域も含まれるために、正確な表現ではない。フランダースの首都を（フランダース地方には含まれない）ブリュッセルと定めたフランダース政府と同じく、いささか挑発的な態度といえる。

(18) 1993年の国家制度改革を受けて創設された、フランス語共同体政府、ワロニー地方政府、ブリュッセル地方政府フランス語共同体委員会の権限に属する国際問題を一元的に扱う組織である。

らにルーヴァン・ラ・ヌーヴにあるジャン・ヴィラル演劇工房 (Atelier Théâtre Jean Vilar)、シャルルロワのアンクル劇場 (Théâtre de l'Ancre) などの劇場が加わっている。首都ブリュッセルにはリドー・ドゥ・ブリュッセル (Rideau de Bruxelles)、パルク王立劇場 (Théâtre royal du Parc)、ギャルリー王立劇場 (Théâtre royal des Galeries)、レ・タヌール劇場 (Théâtre les Tanneurs)、レル劇場 (Théâtre de l'L)、ピュブリック劇場 (Théâtre le Public)、バルサミーヌ劇場 (Théâtre de la Balsamine)、プラス・デ・マルティール劇場 (Théâtre de la Place des Martyrs)、ポッシュ劇場 (Théâtre de la Poche) など多くの劇場が集中している。ブリュッセルにあって、旧常設市場を文化施設に変身させたレ・アール・ドゥ・スカルベーク (Les Halles de Schaerbeek)、もとは礼拝堂だったレ・ブリジッティーンヌ (Les Brigittines) なども現代的・実験的演目によって独特の存在感を示している。

フランダース政府と同様、主要な劇場や上演団体に対しては複数年度助成制度が存在し、重要度に応じて5か年にわたるプログラム契約 (contrat-programme)、4か年ないし2か年の協定 (convention) を政府と交わしている。ジャック・デルキュヴェルリ (Jacques Delcuvellerie) が率いる劇団グルーポフ (Groupov)、ミシェル・ノワレ (Michèle Noiret) やティエリー・スミッツ (Thierry Smits) が率いるダンス・カンパニーが代表的である。ただし上演団体に対する助成はグルーポフが55万€, ミシェル・ノワレが46万€と、フランダースの同格と見なしうるアーティストよりかなり少なく、上演団体以上に劇場など文化施設に重点が置かれていることが推察される。フランス語圏では労働者運動が伝統的に根強く、行動演劇 (théâtre-action) と呼ばれる政治・社会色の強い演劇が今日でも盛んで、17劇団が総額で169万2000€ (2012年度)、最大で30万€超の助成を受けて活動していることも特徴である。

舞台芸術の専門教育についてはブリュッセルにあるINSAS (Institut national supérieur des arts du spectacle) とブリュッセル、リエージュ、モンスの三都市にあるコンセルヴァトワール (conservatoire)、演劇研究については新ルーヴァン大学演劇学科が重要である。舞台芸術会館ラ・ベローヌ (Maison du spectacle - La Bellone、2012年度助成13万9000€) が専門図書館を持ち、芸術家コミュニティに対する情報提供をおこなうなど、助成金ははるかに少ないもののVTIに比較しうる役割を担っている。またベルギーで編集されている演劇専門誌『アルテルナティヴ・テアトラル (Alternatives théâtrales)』(2012年度助成6万6273€)、演劇研究誌『エチュード・テアトラル (Etudes théâtrales)』は、フランス語圏全体で読まれている。ダンスに関しては、コントルダンス (Contredanse) という団体が発行するフリーペーパー『NDD』がある (かつては『ヌーヴェル・ドゥ・ダンス (Nouvelles de danse)』という不定期刊行の雑誌であった)。

フランス語共同体政府舞台芸術関連助成金（2012年度）

助成カテゴリーと団体名	助成金額（€）
国立劇場 Théâtre national	
Théâtre national de la Communauté française	6 516 000
地方演劇センター Centres dramatiques régionaux	
Centre culturel régional de Namur	775 716
Théâtre de la Place	2 494 000
Théâtre Varia	1 768 775
振付センター Centre chorégraphique	
Charleroi/Danses	3 320 000
文化センター Centres culturels	
Le Botanique	3 080 000
Les Halles de Schaerbeek	1 713 000
複合領域 Interdisciplinaire	
Le Manège-Mons	5 392 000
Palais des Beaux-arts de Charleroi	1 677 000
プロフェッショナル協定劇場 Théâtres professionnels conventionnés	
Atelier théâtre Jean Vilar	1 798 806
Théâtre 140 - Spectacles d'aujourd'hui	607 033
Théâtre de l'Ancre	774 002
Théâtre de la Balsamine	798 717
Théâtre de la Place des Martyrs	893 804
Théâtre de Poche	825 400
Théâtre le Public	1 870 000
Théâtre les Tanneurs	852 000
Théâtre royal des Galeries	842 976
Théâtre royal du Parc	598 546
劇団 Compagnies	
Groupov	575 844
Rideau de Bruxelles	1 541 075
移動演劇劇団 Compagnies Théâtres itinérants	
Arsenic	608 000
Les Baladins du Miroir	527 532

助成カテゴリーと団体名	助成金額 (€)
演劇祭 Festivals d'art dramatique	
KunstenFESTIVALdesArts	597 566
音楽 Musique	
Opéra royal de Wallonie	14 654 000
Orchestre philharmonique de Liège	8 599 000
Orchestre royal de chambre de Wallonie	1 323 000

出典 www.artscene.cfwb.be および *Budget 2011 - DO 21 Arts de la scène*, Administration générale de la Culture, Communauté française, 2011から、舞台芸術関連で助成金額が50万 € を越えるものを抜粋

地方政府

地方政府は文化政策の一部、文化財政策に関して責任を負っているが、フランダース地方政府はフランダース共同体政府と一体化している上、ワロニー地方政府の政策にフランス語共同体政府と比べて際立った特徴があるわけではない。むしろ、ドイツ語共同体政府に当該地域の文化財に関する権限を委譲し、ドイツ語共同体政府の文化政策に一貫性を与えていることだけを指摘しておく。ここではむしろ、首都であり、ベルギーで唯一の法律上の二言語地域であり、多民族・多文化地域であるブリュッセル首都地方が、文化政策は地方政府ではなく共同体政府の権限に属するために、本来持っていない不自然ではない独自の文化政策を展開する余地を奪われている逆説と、そのことに対する文化人の新しい動きをとり上げる。

ブリュッセル

ブリュッセル首都地方は、ブリュッセル市を中心とする全19市町村から構成されている。ベルギー連邦王国の首都として、ブリュッセル首都地方は法律上の二言語地域と定められているが、現実上の共通語はフランス語であり、オランダ語が通じないことも多く（フランダース人の不満の原因となる）、パリ、モントリオールに次ぐフランス語圏都市として見ることもできる。ただし、その地理的境界線はワロニー地方に接しておらず、フランダース地方の内部に位置する飛び地を形成している。そのために、ブリュッセル郊外にはフランダース地方に位置するものの、フランス語話者が人口の多数を占める自治体が複数存在し、フランダースのオランダ語一言語主義とフランス語話者がフランス語を用いて生活する権利との深刻な衝突が問題となってきた⁽¹⁹⁾。またブリュッセルはオランダ語とフランス語の両文化が共存するだけでなく、欧州連合やNATOなどの国際機関はもちろん、IETM⁽²⁰⁾などのヨーロッパを中心とする舞台芸術施設・団体を束ねる国際組織の本部も集まり、さらにベルギーやフランスの旧植民地出身者が多く定着した多文化都

市である。住民の3分の1は外国籍であり、さらに3分の1は帰化によってベルギー国籍を取得したといわれ、外国人比率が2分の1にもなるともいわれるほどに高い⁽²¹⁾。同時に失業率も20%と高く、貧富の格差がきわめて大きいことが社会問題となっている。

ブリュッセル首都地方は、1970年からその創設は公式に謳われていたものの、フランダースやワロニーに次ぐ第三の地方として発足するには1989年を待たなければならなかった⁽²²⁾。国内外におけるブリュッセルのイメージと地位の向上、という名目で地方政府は若干の予算と権限を有してはいるものの、文化政策が地方政府の権限には属さないことが、ブリュッセル特有の文脈に合致した独自の文化政策を発展させるための大きな制約となっている。それどころか逆に、市民も理解できないほどに複雑な、民主的とはいいがたい制度がつくり出された。二言語地域ブリュッセル首都地方においては、共同体政府の制定する法の効力は組織を超えて個人までは及ばないとされるため、それを補完するためにフランダース共同体委員会 (VGC、Vlaamse Gemeenschapcommissie)、フランス語共同体委員会 (COCOF、Commission communautaire française)、共同体共通委員会 (COCOM、Commission communautaire commune) が組織されている。委

-
- (19) 2010年に連立政権が崩壊したのも、ブリュッセル＝ハル＝ヴィルヴォルド区（仏 Bruxelles-Hal-Vilvorde、蘭 Brussel-Halle-Vilvoorde、BHV と略される）の分割をめぐるフランダース側の不満が原因であった。BHVとは、ブリュッセル首都地方の市町村と、その周辺に位置するフラームス・ブラバント州（Vlaams-Brabant）の市町村とを合わせた、二言語使用にもとづく選挙区と裁判管轄区域のことである。ブリュッセル首都地方がブリュッセルおよびその周辺の19市町村に限定され、ブラバント/ブラバン州（Brabant）がオランダ語圏とフランス語圏とに分割された後も BHV は分割されずに残っていたために、フランダース地方に位置する自治体においても、ブリュッセル首都地方におけるのと同様にフランス語圏政党に投票することが可能になっていたことが、フランダース側の強い不満の種となっていた。一方、ブリュッセル周辺には、フランダース地方に属しながらフランス語話者が相当数を占める自治体が存在し（ハル＝ヴィルヴォルド区の人口53万人のうちフランス語話者は10～15万人を占めると見られる）、こうした自治体に住むフランス語話者にとっては不利な制度変更となる上に、彼らの票を失うことになるフランス語圏の政党は一致してこれに反対し、妥協することがきわめて困難になっていたのだった。連立政権発足にあたっての8党間合意において、フランス語圏政党は BHV をブリュッセル区とハル＝ヴィルヴォルド区とに分割すること、ブリュッセル首都地方に隣接する6つの便宜措置自治体（communes à facilités）のみを例外として、フランダース地方在住のフランス語話者がフランス語圏政党に対して投票できないようにすることを受け入れたのだった。
- (20) 1981年の設立当初は Informal European Theatre Meeting（非公式ヨーロッパ演劇会合）の略号であったが、現在ではその対象をヨーロッパ以外の国の劇場・上演団体や演劇以外のメディアにも広げ、International Network for Contemporary Performing Arts（現代舞台芸術国際ネットワーク）を名乗っている。
- (21) MM. Robert Lecou et Jean-Pierre Kucheida (Rapport d'information présenté par), « La situation intérieure en Belgique », Commission des affaires étrangères, Assemblée nationale (France), 2012.
- (22) 2010年の総選挙後、連立政権合意形成の妨げになっていたもうひとつの理由に、ブリュッセルの位置づけをめぐる、オランダ語話者とフランス語話者の間で考えが大きく異なっていたことがある。ブリュッセル首都地方をフランダース、ワロニーと同格の第三の地方として位置づけようとするフランス語話者と、これをフランダースとワロニーが対等に共同統治する準地方にとどめたいオランダ語話者との間で合意が得られずにいたのである。BHVの分割と引き替えに、慢性的に歳入不足となって政策実現に支障を来していたブリュッセル首都地方に新たに歳入を移管することを実現させたが、その位置づけは曖昧なままである。

員会とはいっても、それぞれブリュッセル首都地方議会と構成員は基本的に同じでありつつ⁽²³⁾、地方議会とは別に、共同体が権限を有する領域に関係する議会・行政府として機能している。VGCとCOCOFはそれぞれ22箇所、17箇所の地域文化センターに助成をおこなうなどしているがその役割は限定的で、首都の顔となるような主要な文化施設には共同体政府が直接に助成をおこなっている（そのために、前述したように、ブリュッセルの文化予算支出の水準は実態以上に低く見えるのである）。こうした複雑な仕組みの結果、人口100万人の都市の文化政策に連邦政府、2つの共同体政府と3つの共同体委員会、首都地方政府、さらに19市町村（個々の市町村が独自の文化担当助役・部局を持ち、必ずしも連携は十分ではない）が関係し、共同体政府がしばしば主導権を争って互いに対立する一方、首都地方政府には正面から文化政策を立案・実施する権限がないのである。

フランダース政府とフランス語共同体政府の動きは相変わらず鈍いままだが、とりわけブリュッセルが2000年の欧州文化首都のひとつとなった際に、両共同体が協働する上で制度的障害があまりに大きいのに気づかざるを得なかったことを契機として、ブリュッセルの文化の状況に危機感を抱いた文化人・施設間の協調の動きが先行するようになってきている。というのも、ブリュッセルにおいてさえ、わずかな例外を除くと文化施設や上演団体はフランダース政府あるいはフランス語共同体政府の一方からしか助成を受けることができないからだが、そもそもオランダ語とフランス語の二言語で教育をおこない、異なる言語共同体に属する若者の出会いを組織できるような教育機関も首都においてさえまったく存在しないのである（1969年にブリュッセル自由大学も言語別に分割されてしまった）。

その数少ない例外に含まれるのは、先述した連邦政府所管の文化施設のほか、1990年に創設され、ディレクターのフリー・レーズン（Frie Leysen）の際だったセンスによって世界的に注目されるフェスティヴァルに発展したクンステンフェスティヴァルデザール（KunstenFESTIVALdesArts）⁽²⁴⁾、1989年に創設され、ベルギー国内複数都市で開催される音楽祭アルス・ムジカ（Ars Musica）⁽²⁵⁾、かつて両言語で放送を行っていたラジオ局の建物を転用し、コンサートホールを備えた文化施設として1998年に開館したフラジェ（Flagey）、2007年にオープンした現代アート・センターのウィルス（Wiels）などである。中でも、オランダ語圏とフランス語圏、ベルギーと世界の架け橋となることを目指して、複数言語で字幕をつける労もいとわず、コミュ

(23) VGCのみ、そこに5名の外部の人物が加わっている点が異なるほか、COCOFとCOCOMは首都地方にのみ適用される独自の立法をおこなう機能も有している。

(24) フランダース政府の助成金は103万€（2013年度）、フランス語共同体政府助成金は59万7566€（2012年度）である。

(25) 2012年6月にフランダース政府が公表した助成金採択結果によれば、2013年度以降のアルス・ムジカに対する助成金は全額カットされることになり、その将来が危惧されている。2012年度のフランス語共同体政府の助成金は30万9000€である。

ニティの出会いと協働との場となったクンステンフェスティヴァルデザールの功績は大きい。また、オランダ語劇団デイト・デイト (Dito'Dito) とフランス語劇団トランスカンケナル (Transquinquennale) のかねてからの協力関係を発展させるかたちで、KVS とフランス語共同体国立劇場の間の協力も始まっているし、VTI とラ・ペロースも互いの文化制度や芸術家を知るための交流を強化している (これらはもともと歩いて数分の距離にある)。平田オリザが書き下ろし、2008年にKVSで上演された『森の奥』はKVS=デイト・デイトとトランスカンケナルの両方の俳優を起用した多言語作品だったし、2010年から4年間にわたって、フランダースの演出家ヨス・ドゥ・パウ (Josse de Pauw) の作品を両劇場が支援して上演し続けるという。ブリュッセルにある文化施設の言語別ネットワークの間で2007年に協定が交わされ⁽²⁶⁾、さらにRABとBKO (Réseau des arts à Bruxelles と Brussels Kunstenoverleg の略号で、いずれも「ブリュッセル芸術ネットワーク」を意味する) は「ブリュッセルのための文化計画 (Plan culturel pour Bruxelles/Cultuurplan voor Brussel)」(2009年)を策定・発表し、多言語・多文化都市ブリュッセルにふさわしい将来志向の文化政策を提言している。

結論に代えて

2010年6月から2011年12月まで続いた政治危機において、オランダ語とフランス語の言語共同体間の対立は再び先鋭化し、緊張が高まったが、それがあまりの難産であったためか、欧州経済危機が結束を強める方向に働いたのか、新内閣が発足した今、緊張は和らいでいるように見える。しかし、現状においては、両言語共同体間の溝が埋まり、国民的統合が再び強化されることは考えられず、それぞれが独自の発展を遂げる傾向がさらに強まるだろう。さらに、新たな国家制度改革を実現していく過程において、いつ対立は再燃するか分からず、予断をゆるさない。だが、両言語共同体の対立の原因でもあり、最後の絆でもあるブリュッセルが、ベルギーの将来にとっても、芸術文化の発展にとっても鍵となり続けることも確かであろう。

(26) フランス語系のRAB (Réseau des arts à Bruxelles) とオランダ語系のBKO (Brussels Kunstenoverleg) である。

